

23. アウトリーチの実践

専門知識を広めることで、生活向上や安全安心な環境を構築するために寄与することを目的とした広報活動は、これだけ科学技術が進歩し、災害が多発している今こそ求められています。ここでは防災を例にして、専門知識がどのようにして浸透されて、市民の行動へと展開できるのかについて紹介します。その場合には、だれがそれを担い、だれにアウトリーチするのが基本で、そのためにどのようなプログラムやプロセスが必要なのかということになると思います。

自然災害は、素因も誘因もわかってはいますが、どちらも人間が制御して抑止することとはほとんどの場合に不可能です。そうすると、早期に兆候を予知してかわすこと、つまり避難することが最善の策になることは明確です。大地震や大型台風が来るたびに、被害や被害者が減るどころか増加する傾向があります。これには様々な要因はあると思われませんが、まずは、基礎的なことを正しく知ることがスタートになります。避難所はここですよ、警報は出しますよ、ハザードマップを渡しますよ ということだけでは防災にはなりません。これらを適正かつ効果的に活用するためにも、防災教育は欠かせません。

そして、この防災教育は単なる知識の伝達ではなく、自然災害を正しく理解して、自分での確な判断をして行動できることを目指しています。そのためには、様々な取り組みの中で、学校教育が最も急がば回れ的に効果的で、広がりもあるのではないかと考えています。

つまり、小学校や中学校をターゲットにすれば、家庭へ広がりますし、地域へ展開されるからです。これらの多くは、理科教育や総合学習という中で行われることになりませんが、百科事典的な導入では、関心にばらつきが出ます。そこで、我々の活動では、地域知を大事にすることからリーフレットを作成して話をするにしています。地域にある様々な先人のこと、地形や地質の成り立ち、まちの形成史、災害記録、言い伝え、地名の由来など身近なことを紹介しながら、その背景を知ってもらうということを導入部に行っています。

次に、大事なことは自分で汗をかくことが大事で、まず、地域でフィールドワークを行うことで、そこでは新たな発見や気づきがあります。そのことが大変重要で、関心があるが故の発見ですので、それを自分の情報として地図上に整理することは、情報の分析評価にもなりますので、有効な方法になると思います。その中で、地域の成り立ちを考えるということになります。もちろん、その中で、作図や手作業で確認するというところを取り入れていくことで、より一層地域を理解し、自然災害のメカニズム、潜在しているリスク、対応などに続くということになると思います。言葉では知っていても、テレビなどの報道では見えても自らの手で再現できるということは感動もので、記憶に残るものになると思います。以上のようなことは、正しく恐れるということの基礎になるわけで、単なる物知りではなく、どのようにすればよいのかという判断力を生むことになり、いわば行政や研究者の間に立つ通訳者として、最新情報を紹介しながら、いかに関心を持っていただいてそれを継続させるのがアウトリーチがめざすところにもなります。